

〔史料紹介〕

渡部平太夫・渡部勝之助

『桑名日記・柏崎日記』(その三)

松川 由紀子

一八四五年三月一日(鎌之助九歳)

手習休日に付鎌之助隣の熊市と釣に行

一つも釣らず帰ったげな。

同年四月二十二日

鎌の単物片付ると一寸見た処、襟方の  
処五寸程破れ、脇の下切のついてある所よ  
り八寸程引裂あり、お婆もびっくり致し、  
是は又何したことじゃ情ないことを仕おっ  
たぞ。昨日のばん衾を着やれと云たら、つ  
いぞない事アイと辺事して直に内へ来て着  
替た様子、なぜ破たら破れた御免なさのど  
あやまらずかくしておいた憎いやつ、どふ  
して破たと問詰められ、無恥白状いたすに  
は、きのふ鬼事をして誰とかさがつかまり  
なった時破れたと云。ズブトイには困りは  
てる。

同年七月二十七日

この間より留五郎と約束のよし、鎌之

助、横村藤助、留五郎についてはぜ釣に

行、初めてわらじばきにて行、気がせわし

き故、きやん／＼鳴りつけて大騒動、釣竿

は八幡瀬古にて廿八文にて買ふて貰ひしよ

し。弁当飯を握るやら、ビク腰に付てや

り、蛤を切刃物をくれと云、漸皆拵ひ出来

出て行。

同年九月二十一日

鎌之助手習より帰り子供同志初音とり

行。たつた四本とつて来たげな。

同年十月二十日

鎌之助早く目覚し小用に起、直に着物を

きせ本説に行。……無程鎌帰る。今日は見

合てくれと先生が出て来て云ひなざるから

帰てきたと云。

同年十月二十九日

鎌暮相に勝助、銀太、加納兄弟をつれて

きて席書するから、墨をすれの紙出してく

れと大騒。半紙に一字づつ書く。郡の縫次

郎の処へ見て貰ひに行。鎌は西の一にな

り、皆紙を取てくる。鎌は山の字一枚、寿

字一枚也。

同年十一月八日

鎌之助今になつても百人一首を知らぬ

と、歌かるたを取ることがならぬと云たれ

ば、そんなら教へてくんなへ、おばや百人

一首の本を出してくれやいと、やん／＼い

ふ故、おなか本を出してやるとサア教へて

くんなへと云故教てやる。十五六今日中に

覚る也。

同年十二月二十一日（鎌之助十歳）

お婆云にはお爺さま大が、い風もよふなつた様だから御湯へ行ておいでなさいましといへば、鎌おじめさ行なんナととめる。イヤもふ入つてもよかるふて、鎌よくないてひよつと悪くなりなつて死ぬると大変だ、このゑう内を置て、柏崎のびんぼう内へ行ンければならんから行なんナと云故、皆々おかしがり大笑也。七ツ八ツは悪たれ盛り云ども、この節猶にくまれ口をきく。あくれる故お婆も持てあます。おなかなどにも云には、全体妹に云様な塩梅、そんなずるゐこと云からかまわぬとおなかゞ云ば、湧出す様しやべり中くおなかなどにちつとも負けずにしやべるやらたくやら、するとアレ鎌がいけんぜとおなか云故、お婆腹立又そふ云なんぞと云と、アレいけんぜく聞たくもなへと云跡から、アレ又いけんぜと云。

一八四六年五月二十二日

鎌之助一昨日頃より子供同志綱すきはじめ、稻倉へ昼より持て行。昨日は内の二階に集りすく。今日は御代田へ持て行。綱な

ど決してすくには及ばぬから、手習と書物に精出して習はにやならぬと云ば、皆子供がする故、おれもすきたくてならぬ、稲畑買ふのにするから、すかせてくんなへと云故、致し方なし。

同年十月五日

鎌 新矢田へ本読に行候処、鍵がかつて留守だとして帰る。

一八四七年二月二日（鎌之助十一歳）

旧冬より御家中も町方もこま廻し大流行にて、鎌もこま廻し大分習ひ、チョイト懸とてこまを手に取りそれより紐へうつし、横にしてひやふ三やよ五や六七八九十と昨夕方に鎌百九十八にて落し、あと二つで二百懸る処をおとしたと残念がる。上手な子供は三百も四百も懸る。二百程も懸るとこまに勢つき、ズンく首出し候よし。その外曲廻しをする子供も有之候よし。

同年八月六日

愛宕の風呂へ若い者入りに行候に付、鎌之助も手習より帰り行候よし。

同年十月二十四日

鎌之助徳治と茶わんぶせに行。暮合に帰る。二合斗とつてくる。

一八四八年一月十一日（鎌之助十二歳）

鎌裏にて武者風揚る。……今夜鎌之助横村へテツコ振に行。鼻紙持てゆく。四五十枚持て行、七八十枚持て帰り候様子也。

柏崎日記より

一八三九年八月十八日（お禄五か月）

七ツ過交代帰宅の処、お菊部屋に泣て居り候に付、御状に何か悲しき事でもと申せば、そんな事はないけれど、鎌子に逢ひ度てくならんと申候て、泪こぼし居り候に付、私申候にそんな馬鹿な事不忠に、早くめしに致せと申候へば、漸々立出御膳立にかゝり申候。

同年八月二十二日

小女大分手利いて参り、何ぞあづけておけば、余程ひとり遊び致し候。しかし未だ這ふことも出来不申。のめつて居り申候。

同年十月一日

ろく昼過より熱出時々晩鳴き出し困り入申候。兎角目宜敷なく、直ると又わるくなり此頃は又赤んべいになり困入候。そのせいで虫ねつにて可有之、と被存候。

同年十月十九日

小女宵の一ねりは寢候へども、夫より何様に致し候ても、だゞ起し聞不申、はだかにして抱てねると、ぐうとも不言眠り申候。それ故毎晩私に抱てねてくれと申には困り入申候。しつこの時は目覚泣く故、やればする故不調法はあまりなし。

同年十月二十五日

小女兩三日以前よりちよちよち教ひ候処、よく覚ひ申候、是も鎌子と同様きせる好きにて、きせるを持せて置ば、余念なくなめて居り候へども、あぶなき故じきに取上げれば、気げんわるし。

同年十月三十一日

お六この間はお六も覚ひ、気が向けばよく致し申候。厚着故はい出し不申、氣に入たる持遊びがあれば、余程ひとり遊び致し申候。短日故昼寝は少々つつ二度、夜

は毎晩五ツ頃迄、起て居り申候。

同年十一月十五日

小女食ひ初め未だ致不申候に付、今日真似方仕り候。竹内の衆不残お呼び仕り候。山崎は親類忌中に付呼び不申、酒の肴は大根とはたはたの煮付一鉢、かぼちゃ一鉢香の物メ三品也。膳部は平のつべい皿はたはた二つづ、汁豆ふ小豆めし右の通り也。四ツ半頃迄皆様お咄し也。小女この頃はかゝを見るところと申し候。形り斗り大きくて未だ這ひ不申、後へずり下る斗り也。

同年十一月十九日

小女守りに抱せて洗湯へ参り申候。小女大悦び是も湯好きにて仕合に御座候。

同年十一月二十日

小女におまんぢう一つ預け候処大悦び、ぐずもみに致し離し不申候。毎晩五ツ迄は起て居り困り候。

同年十一月二十七日

小女にぎやかな所悦び、竹内にて上きげん、叔母さ行燈を破らせて大悦びに御座候。

同年十二月八日

今日ろく竹内にてちりげへ灸を五つすえて貰ひ申候。この頃は齒が生ひ、香の物挿喰ひかき申候。

同年十二月十六日

七ツ過迄小女兎角熱有之、今日は乳も余り給はず、だゞ起し困り入申候。……小女寝ると泣き出し、どうしてもだまらず、起て抱て居ればよく眠り申候。

同年十二月十七日

小女今朝はおとなしく、少しは元氣も出遊び申候。宵の内だだ起し候に付、救命丸一粒為吞候処、夫よりおとなしく眠り申候。

同年十二月十八日

小女大いに宜しく候へども、暮合淋しき故泣出し申候に付、竹内へつれて参り候。

同年十二月三十一日

小女にも本膳をすひ申候処、両手振り立大悦び、少々油断の内膳引寄せ、飯わんひつくり返し、まゝ顔へぬり付嬉しがり申候。

一八四〇年一月五日

お菊毎日御つかわし下されし御状日記、

くり返し／＼拝見致して居り、鏝こに逢ひたがりくどき居り申候。御向の衆不残子供好にて、ろく大可愛がり、竹内へばかり一日何十べんとなり参り候。

同年一月三十日

お六そろそろ這い出し申候。とかく目よろしからず困り入申候。先日豆腐売が見て、自灸治上手の者有之よし知らせてくれ候。是が中浜の番太のかか也。これへ参り灸点おろしてもらひ、背中へ毎日七日の間一つづつすゑてやり候。今朝までにて一廻り相済申候。昨日昼吉田より状届けられ早速披見仕、先々御機嫌にて御越歳遊大安心仕候。不相替日記細く御認、その上鐘児の手形せいの高さ手足の太さまで御つかわし被下置、誠に誠に難有奉存候。さてこなたにて思ひ候には大違にて大造に太り、せいも高く手の平も大きく誠に驚入申候。右の所お菊手に取つく／＼眺め又々恋しく相成り候様子にて涙こぼし居り申候。

同年二月二十日

ろく先日より顔に吹出物いたし、次第に

ふえてまいり、地ばれも少しいたし、かゆがり困り入申候。今日海津祐真と申医者に來て見てくれる様状つかわし、見てもらい候処、全く胎毒のよし、つむりにも少見へ候。つむりへ沢山出るやうになれば、顔の出来物引いて仕舞間丸薬を二三粒づつ飲ませるやう申候。

同年二月二十九日

金子よりはだか人形祝つてまいる。初節句は不致、内裏ばかり机の上にも飾り置くつもり候。御向いの衆おききいれなし。叔母さ明日は、おれが飾つてやるとて、今日お向いの雛良きところばかり運んで置被成、小内裏一対、はやし方五つ、かむる三つ、ぜんわん小道具色々屏風毛せんまで御持参なり。隣の荒井より小はま弓三はり祝うて来る。当所は雛人形などは一切無之。江戸より皆取り寄せ候ことなり。

同年四月二十五日（お禄一歳）

お六このごろは折々二足三足、つづ歩き初め候。もの言ふこと出来不申むまむま、はあ斗也。きのふお向へ参り居り、着物をま

くり、二本指で何かつまむ真似いたしては口へ入、度々するゆへ、この子は猿がのみに取様なことをすると思ひ、皆々不思議千萬、よくよく考へ候へば、しらみ取る真似也。守女使の出先や、守りに行き何処となくつれて参り候故、誰かしらみ取るのを見覚てきたか、但し守がどこかで取るのを覚ひ候やら先是に違ひなく、みなみな不思議又大笑也。何でも見ると真似いたし候。六もひようげものになると見へ申候。

同年五月四日

小女自分の枕を見ると胸に抱き、ねんねんころころの真似いたし、中々こしやくなものに御座候。

同年六月六日

小女今朝御向へ参り候処、民女竹の皮に梅干入なめて居り候所ろく見付、よこせと追っかけ、民坊はやらんという、大げんかにて、六にも別にこしろふて被遣候所、漸きさん直り、それよりなめなめするうち、梅干つぶれすっぱくなり顔しかめほり捨て仕舞候よし。叔母さのおはなし也。中々こしやくになり候へども、まだ一向に口きか

れず、かかも出来不申候。只ねんねと、ばア、むまむま斗也。神棚へ向ひ時宜はよくいたし候。その仕かたは手を合せ暫く立つて居り、顔に両手を当て前へのめり候ての御時宜なり、一本まいれも出来候へども、知らぬ人の前にては、恥しいやら不致。

同年六月十一日

お六兩三日よく歩き、もう這ふことは止めにしたし候。夫でも極急ぐ時は這ひ付申候。今日も巨燵やぐらの上に独りで上り、高いたかい致し又ひとり下り候。

同年六月十七日

小女今日は下へ下りやうと申て不聞。草屨を結びつけて出し候へば、誠に大悦び、生れて始めての事故面白くてならんと見へたり。先下すと内の前より堀江の前辺を、二丁斗の所、休みなしに飛んで参り候よし、夫よりやつとだましつれて帰り、内へ上げたれば大だだおこし候。

同年六月十九日

小女二三日名を呼ぶと返事いたし候。かかといふことも出来申候。

同年六月二十一日

ろく行水を面白がり、いつまでも上るまへといふには困り入申候。

同年七月一日

例年の通り陣屋の子供麦わらにて船こしらひ七夕送りと唱ひ、今晚より笛太鼓にて、陣屋中囃立さわぎ申候。盆の様に提燈つけて歩行申候。おろくもお向より赤ひ提燈御貰ひ申候にて、守と遊びに出大悦びいたし五ッ過帰申候。お菊も大分よろしく候へども起きて居兼一日寝通也。柏崎ふさわぬかよわへには困り入候。

同年八月七日

おろく悪ひことするは、なかなか一通の事にてはなし、少し油断すると水瓶の水は汲み出し、板の間中水だらけ、湯殿へ行水鉢の水あたまたから、あびるやら、はだしで庭へ降りるやら、くどの灰はつかみ出す。灰吹は置へこぼすやら、か様な女の子もあるものかとあきれ申候。しかし薬三まいするよりましかと申居候。

同年同年九月六日

おろく水がめの中に真つ逆さに落る、足先の斗に見ゆる、お菊うろたへて上る、水

も不呑何の事もなし。

同年十月二十八日

お六このごろは大分口が廻り、ちやちや、かゝ、おぼぶ、しょんべ、うんこ、まめ、とゝ、その多いいろいろ片ことは出来申候。

同年十一月十五日

大工勇藏参り雪囲ひを付て呉れ候。今日は鎌之助の祝ひの心持にて、小豆めしに、いも、とうふのくず煮いたし、お向の叔母様、民女呼び申候。桑名にても定て御祝ひ被成下、この節は鎌之助元氣を出してさわぎ付て居るだろふと申し出し居り申候。夜分は豆多りが出来、お向の衆不残勇藏もはなして居り申候。

同年十二月十五日

この頃はおろく大分口廻り、守女おゆきのことを、お多ちといふ、御向の運公守にかゝり合来年は大方よい聿を取るだろふ、お多ちむまいなア、むまいなアと被申候を覚て居り、今日昼めしの時分、守の顔を見詰て、お多ちむまいなアといふ。誠に皆大笑ひいたし候。どうかするとおとつさとい

ふことも御座候。八月ごろより、しよばよくわきまひ、不調法いたすこと絶てなし、おきく仕合とよろこび候。

一八四一年三月九日

笠はり、お六達者になり、お菊の草履下駄まで引かけ、ばたりばたり出かけ申候。次第に越後言葉能覚ひ、大笑ひのこと度々御座候。イツチよく申ことはモダアといふこと也。おろくこれは誰んだと申セバ、おれんダモダア、又アチスエンカといふとイヤダモダア、何でも後へモダア付るを面白がり、みんながかりあふ。毎日守りと町へ行遊んでまいる故、おのづと越後者になり申候。

同年三月十八日

この節八重桜さかり、おろく余程歩き、道々すみれの花を折り大悦び也。

同年三月二十日（お禄二歳）

越後者はまることをとぶる又はとびると申、お六よく覚ひ、外で水たまりへはまり足をよごして、カ、トビッタゼと申、お菊越後言葉聞くもいまいまして申し候へ共、六の覚ひるには是非もなし。

同年五月二十一日

……一人でよく遊びに出、近所の子供と竹の皮に梅干入てなめて遊ぶ、時々おつかちち一ばへのまふと外から申て帰り候。ちち大好にて一向ままを食、べず、その外食物はねだりなし。

同年五月二十九日

帰り候ところお六、お菊に抱かれてうなつている。昼前に腹が痛へと申帰り申候。それはくわくらんにてもあるべしと申て、昼飯を食べている内、ウンコにゆかふと申、つれて参り候へども通じなし、その内もがき出し、だかれてみたり寝たりころげたり、大きに苦しそふ也。一声大うなりすると、目をしつかり閉ち歯をくひしめ請答なし。お菊大変だ来て見やれと申、守りに御帳部屋へ救命丸をもらひに遣す。お向へ申と皆々おいで、これは大変大変にて熊の胆を持てきてとへて口へつき込むと気が付。医者所へも部屋者飛ばせる。しばらくする内少し通じもあり痛みも大分よろしく、乳をたべ申候。みなみな大悦誠に荒きもぬかれ候。医者も参り、もはや案事被

成候ことなしと申し丸薬を置て帰り候。別にこな薬を遣し候間とりに遣せと申候故、

又部屋者に取りに遣す。早速取てまいる。水あめを買ふてそれに交せて飲ませる。少したつとしたか吐き申す。それより大いによろしくなり申候。

同年九月九日

おろく極縞の洗濯綿入を着せ鐙の常をしめてやる。誠に大悦髪を多つてくんなへとねだる。いつもの通りびんこ少しづつ摘み寄せ、真中で結び付てやる。前から見ればまげがあり、後ろから見ればびんこばかりにて、いよいよひようげきつた風付也。

同年九月十四日

おろくこの頃は守りもいらす、ひとりでお向今日極楽寺にて、おてふさの施餓鬼を被成候。八ツ前より御参詣なり、おきくも無抛おろくつれて参詣いたし候。おきく着物が悪くその上半えりそで口等も未だ着替致し不申、誠にいやがり、頭痛やみや

同年十月十一日

お向今日極楽寺にて、おてふさの施餓鬼を被成候。八ツ前より御参詣なり、おきくも無抛おろくつれて参詣いたし候。おきく着物が悪くその上半えりそで口等も未だ着替致し不申、誠にいやがり、頭痛やみや

み出て参り候。おろくの着物鐘児のおふるは未出来不申、青梅の着物着せて行。小さくなり甚見苦敷候へども、お六大悦おどり上り参り候。

同年十一月二日

お六朝起ると寝るまで、背中に枕負ひ昼寝する時も負んでいたし候。この頃もう道悪くどこへも出られず、一日火燵の廻りにて、ねんねさまごとには困り候。

同年十二月二十四日

明番より帰る。お六待ちかね抱かれてある。いろいろ話をする。てまり歌じじはばのむかしも所々おぼへて語り候。

同年十二月二十九日

お六せんだく着物きかへ、膳に向ひ何もかもよく食べ、お酒を少したべ赤くなり、いろいろどうげ口を聞く。おれは四つあんちやんは七つお民さは八つおたよきは九つになりなつたとこの間より教ふるられ、覚て咄しいたし候。そんならおつかさはいくつと申せば、じつと考へ居り、申にはおかつさは三つ、おとつきはと申せば、なつてもらちがなへがいと申、誠に大笑いたし候。

何ぞ取てきやれの、持てきやれと申しても見へぬ時には、なつてもらちがなへがいと申すこと近頃のくせにて、皆々かかり合ひ候。

一八四二年二月十三日

暮合よりお向の衆不残日記を聞きに御出被成候ところ、おかしき所大笑腹筋より候。五ツ頃までに読仕廻ふ。お六起て居り、所々ききつけとも笑ひいたし候。その内にもアンチはおばのおかんこクチャへという所をよく覚ひ申候。先頃おゆきの参りおり候時、だかれており、かいてかいてと申、どこでござりますと申ても言はず、只かいてかいてと、背中ではござりますかと申せば、いゝや、おゆきの耳のそばで口をつけ、おかんこがかへでと申、おゆきころげて笑ひ申候。丁度鎌こと符合いたし候。

同年三月五日

お六申には極楽寺の花がさへたからおとつさ見にゆきなんかとねだりぬく。つくし沢山取つてくる。

同年三月十九日（お禄三歳）

今日はお六の誕生日故赤のまんまに豆腐汁が出来申候。

同年三月二十二日

お六洗湯へ入れんとするとイヤダ、イヤダ、イヤダと申て不聞。そんなら腰湯ばかりしなざるかと申、漸々承知致し上り段にて腰湯いたしくれ候。その内私共はゆるゆる入り申候。女の子のおく病には困り候。

同年四月十一日（真吾出生）

明け方より又こわり出し候へども、とかく生れそふと申程の痛みでなし、度々湯づけの薬の汁のとのませ候。叔母さの思付にて人参をせんじて飲ませると、内より持ておくれ被成、それをせんじ飲ませ間もなく大虫もこわらず安産致し男子出生候。五ツ半過頃也。みなみな大安堵その上女子のつもりに御座候ところ男子にて別して大悦仕候。お菊、お六産み候節ちとたつきの気味有之候故、要心いたし早速酢と火を入れてかがせ、安神散を飲ませ候ところ、甚元氣よろしく、その内に追々聞付飲にかみさん達参りくれ候。お六婦り何事やらんと泣き出、ちと騒がしく有之候ところ、お

菊ちとふさがり汗出口びる色変り候故、大きにたまげ又酔の薬のとみなみな世話いたし被下、医者への迎にも遣し大分開き候内医者参り丸薬飲ませ少し立内気分しつかりいたし医者脈を取り、もふ御氣遣ひなしと申。その内栗本より二尺五寸ばかりの大鯛祝つて参りいわしを買ひ、取り合ひず酒を出し、鯛の潮煮致し医者にも振舞申候。屈は運公に願出候。生れ子湯をつかはせ掃除相済申候。目大きく鼻筋通り中高にて鏡にそつくりだと申候。お六よりはきりやうよしなり。

同年六月十四日

真吾一兩日ちと笑ひ出し、大小便共やる度に致し、二三日はむつきさつばりよごし不申。

同年七月十五日

明方より小僧目をさましぐずぐずと申てお菊の胸をふみ困り、行燈つけてくれと申故枕の引出しより火打出し火を打行燈つけると大歡び笑ふやら語るやら、誠に上機嫌や。おきく少しはよけれどもとかく力不付、起て居りかね困り入候。

同年九月二十九日

木村に桑名咄いろいろ承り、鎌児の咄も承り、それより日記とところどころ、面白い所読む。皆々あきれかへり、誠に桑名にお出で被成も同様実に眼に見ゆる様也と申、か様の日記は日本に稀なることなり。四年來一日も欠けずとは御氣根の程恐れ入りたること也と感心せぬ者は無之候。足立、真吾をさんざ抱く。にこにこ笑い、兄貴に生きうつし、これも大男になると見ゆるなどとはめ申候。昨日真吾の手に墨をつけて紙に押す。

同年十月二十三日

お六明け方より熱大きにさめ正気になり候。ほうそうらしきもの額に三つ四つ、口の端にも三つ四つ見へ候。……お六今朝よりも余程数見へ候へども、目鼻の辺は一向少く、医者も参りくれ候よし。この分では格別のこととも有間敷由。(つづく)

(山口女子大学)

幼児の教育 第七十六卷第十一号

十一月号 © 定価二〇〇円

昭和五十二年十月二十五日 印刷

昭和五十二年十一月一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売所  
所 フレーベル館にお願いたします

※万一製品不良本がございましたら、おとりかえいたします。